

最上川学プロジェクトが始動

流域連携・大学連携の模索



大学コンソーシアムとの連携へ

- 山形県内の大学・高等教育機関が連携した「大学コンソーシアムやまがた」が最上川学教育プログラム始動
- 地域の**NPO**組織や活動団体と連携協働しながら教育プログラムの開発や地域づくりプログラムを共に育んでいく、というものの。



- 最上川流域 = 山形県全域へ展開

最上川学とは

最上川流域環境の特徴

- 最上川流域の生態系は、原生自然だけではなく、流域に暮らす人々の森里川海産業とともに改変され、維持されている。流域の自然や文化は農山漁村住民の暮らしの営みと織りなしあいながら形成されている。

最上川学とは？

- ・最上川学とは、最上川流域の自然と文化、農山漁村に暮らしてきた人々の知恵と技術から学ぶことを通して、それを革新的に受け継ぎ**21**世紀に生かすべく新たな暮らしや産業のスタイルや生存環境の在り方を模索すること。
- ・地元農山漁村住民と協働連携しながら対等に運営される形で、共に学ぶ活動を展開し、調査研究を行いたい。
- ・学の担い手は、大学・研究者だけでなく、地元住民や関係する外部の一般の方々など多くの主体に面的に広げられる開かれたものとして設計していきたい。

プロジェクトの運営

～多主体連携による総合力で多様なプログラム展開を運営する～

- 大学間連携「大学コンソーシアムやまがた」
(大学間、研究者間、学生間等のネットワーク)
- 地域づくり・教育NPOとの連携協働
- 自治体と連携協働、自治体間連携の活性化
- 企業との連携協働

プロジェクトの内容

～2009年度最上川学教育プロジェクト～

- 1, 最上川学推進センターの開設
- 2, 最上川学教育プログラムの試行実施
- 3, 最上川学フォーラムの開催
- 4, 情報サイト「最上川.Net」の開設
全部ブログで構成
市民団体、NPO、行政、学生、研究者が書き込み可能。
地域別・分野別・著者別・所属別で分類整理される。
これそのものが生きた知的体系として見ることもできる。

廃校舎を利用した最上川学推進センター

※9月には全県の大学とテレビ会議システムで結ばれる。



中間支援NPO,地元活動団体、行政、大学コンソーシアムの4者で契約を結び、維持管理・運営されている。

学生組織の発足

最上川学プロジェクトを
サポートする学生組織が発足



学内における勉強会の様子
活発な議論が交わされました



古老から聞き書き

ミッションを実践



伝統川舟を再生し調査・実習を開始しました



最上川学・Netへの情報が蓄積



最上川学.netのWebサイトへようこそ！このサイトは山形の母なる川「最上川」の自然と文化、流域に暮らす人々の知恵と技術をテーマにした教育・研究活動の一環として制作され、運営には山形県内の大学等で構成する「大学コンソーシアムやまがた*」があたっています。最上川学.netの概要については、「概要」ページをご覧ください。

[ログイン](#)

google search

[検索](#)

*平成16年4月に設立された、山形県内の大学（4機関）・短期大学（3機関）・高等専門学校（1機関）・放送大学等（3機関）の11教育機関と山形県の連合組織（PDF:2.02MB）です。

ニュース

後期間講科目「最上川俯瞰講義」の受講生を大募集！！
大学コンソーシアムやまがたでは、平成21年度後期間講科目...

最上川学教育プログラム現地試行実践3を開催しました。

8月8日～10日に酒田市飛鳥

最上川学

後期間講科目「最上川俯瞰講義」の受講生を大募集！！
平成21年度後期間講科目「最上川俯瞰講義」（2単位...

最上川の巡検を通して

私は最上川における巡検において最上川の治水と利水につ

教育プログラム

飛鳥地元学
8月8日～10日に飛鳥に行ってきました！法木集落での地...

舟形地元学

7月11日～12日に舟形に行ってきました！1日目は、00...

フォーラム

第1回最上川学フォーラム in清川
6月19・20日に最上川学で清川に行ってきました。そこ...

最上川学フォーラム1日目ガイドプログラム詳細行程（第1回試行教育プログラム）



カテゴリ: 飛島
飛島地元学

09年8月25日 12:28 : 佐藤 真由 (山形大学 / 学務)

8月8日～10日に飛島に行ってきました！法木集落での地元学を中心に紹介したいと思います。

最初に、齋藤正一先生が飛島の歴史を、資料を見せながら説明してくださいました。ここで飛島の基礎知識を習得。飛島は、最初からこの名前ではなく、都島・渡島・別れの島・鶴路の島・潮島・豊島・とど島、と変わった後、江戸時代の初め頃から「飛島」となったのだそうです。また、島の成因は、飛島は鳥海山の大火の際に飛んできたもので、今も鳥海山の火口には飛島と同じ大きさの穴が空いているという説もあるというのが驚き。「こんな大きなものが飛んできたのかなあ」とサポーター同士で話していました。火災の歴史や、農道が出来たときの事の話なども聞かせていただきました。飛島は、婦人消防発祥の地と聞いてびっくり。出稼ぎと関係があるんですね。こうして詳しく島の歴史を説明出来る方がいるということはすごい。お年寄りは主です。



新規投稿

ログイン

コーナー内検索



※サイト全体を対象にした検索は、TOPページで行えます。

地域

最上川学

分野

自然文化歴史

絞り込み

現在の登録件数：13件

2009年8月

月	火	水	木	金	土	日
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

◀ 7月

メディアへの掲載状況

09年3月～11月



2009年(平成21年)
3月7日
(土曜日)

発行所
山形新聞社
〒990-8550
山形市旅籠町3-5-12
電話・代表023(422)5271
©山形新聞社 2009

滔々

とうとう

最上川今昔

「地域に伝わる知恵や技術、やまがた」が進め山形のすゝきは地元の暮らし。最上川学」の中にある。そういうものを担当教員で山形大認識することが地域の再生に。大学連携推進室准つながら、これからの世の中。教授の出川真也さを生きていくためのヒントに。ん30」庄内町」もなる」。高等教育機関で組はこう語る。織する。大学コンソーシアム。最上川学は最上

第15部 ひらく 7 最上川学

「地域再生」研究に磨き

した。少子高齢化と過疎化。山間部の農村の「宿命」に角川地区も悩んでいた。東北大の大学院生だった出川さんが、この地区で取り組んだのは、地元の人たちが自分たちの地域を再発見する「地元学」。

いつしか「ここは何もない。こんな所にいたってただ」とぼしていた住民の意識が変わり、住民自身が「先生」となり、地元の文化や伝統などを伝える「角川里の自然環境学校」を立ち上げた。

さらに〇七年、角川のみならず、最上、庄内地方の他地域で取り組んでいる活動をつないでいこうと特定非営利活動法人(NPO法人)「里の自然文化共育研究所」を設立した。

(「滔々と 最上川今昔」取材班、題字は鶴岡書道会顧問の酒井南山氏)



最上川について自分たちが住む地区の人から説明を聞く子どもたち
=庄内町清川

ホームページで動画が見られます

22面に続く

滔くと

最上川今昔

1面から続く

った。一方、「山菜を採る秘密の場所があるんだ。でも教

さんは「最上、庄内地域の集落の生活は、川筋、尾根筋を一本越えれば変わる。地域の多様性をそのまま生かし、生活の楽しみを含んだ、山には山の、海なら海の暮らしの流儀、知恵があるから。現代社会に生じているひずみを取り越えるいろんなヒントがある」と語る。そして、それらの地域を有機的に結び付ければ「次世代のライフスタイル

が見えてくる」。母なる川から学ぶ最上川学は、私たちに新たな生き方を示してくれるかもしれない。

昨年一月から連載してきた「滔々と 最上川今昔」は今回で終わります。これまで登場した方々による座談会を、今月中に掲載する予定です。

次代の生き方見える

戸沢村の山あい、角川地区に住み込んで研究した約六年は、山形大准教授の出川真也さんに何をもちがったのだろう。「角川で活動するうちに、山村が抱える問題は山村だけの問題ではないことが見えてきた。最上と庄内は、かつては最上川舟運でつながっていた地域。流域の農山漁村が連携することでそれぞれの地域の再生の活動に磨きがかかると考えた」と出川さんは説明する。この考え方は最上川学の考えとも重なった。角川の「里の自然文化共育研究所」は最上川学でも地域間、地域と研究機関を結ぶ重要な役割を担う。

「えないよ」などと笑いながら目を輝かせて話す住民もいた。参加した山本能道さん(20)「山形大工学部二年」は「こんなに自然があるのもつたいたい。学術的な面からアプローチする研究所などがあれば、この自然を生かせるし、若者も呼び込めるのではないか」と語る。太田和慶さん(19)「同大理学部二年」は月に一度ほど角川地区に通い、森林の手入れを手伝ったりしている。「長期間滞在してみたら、一割にも満たないかもしれないが、それでも(こういう地域での生活が)『いいな』と思う若者はいる」と感じる。

昨年八月、研究所の企画で、山形大の学生や角川の子どもたちが、二泊三日で庄内町立谷沢などを訪れた。地元住民と語り合つと、住民からは「若者が減っているし、不安がたたくさんある」という声が上が

最上川に連なる農山漁村は、舟運という共通項で結ばれていただけではない。出川



地元の人たちから最上川の漁などについて話を聞く
出川真也さん(左) =庄内町清川

「最上川学」開講

6日 大学などの共同組織

単位互換や合同講義など、芸術工科大など大学・短大・県内大学・教育機関の連携や高専など12機関で構成。「最上川学」の開講は文化的遺産としての価値の構築や、住民との協働による教育メニエーの開発につながる狙いがある。単位認定の日から開講する。流域の歴史や自然への理解を深め、住民向けフォーラムなども展開していく。

6日に始まる前期開講科目「最上川の自然と文化」では計3回(1回1.9時間程度)の現地見学を通して1単位を認定。江戸時代から流域の風土病とも言われた「ツツガムシ」の退治祈願に建立された明神、河口

6月23日山形新聞

最上川を教育の題材に

最上川流域の文化や暮らしの知恵を受け継ぎ、地域再生につながる学問の構築を目指す最上川学フォーラムが20、21の両日、庄内町花崎の最上川学推進センター(旧清川小)などで開かれた。参加者約100人は地元の漁師や農家による講話やパネルディスカッションを通じ、最上川を教育の題材として活用する方法を考えた。

庄内でフォーラム

活用策探る 講話やパネル討論



最上川流域を学びながら教育の題材として活用する方法を考えた最上川学フォーラム＝庄内町・最上川学推進センター

同センターは、県内の高等教育機関と県の計12機関で構成する「大学コンソーシアムやまがた」が19日に開設した。3月に開校した旧清川小の校舎を庄内町から無償で借り受け、最上川流域での研究や情報交換の場とする。センター内には夏までテレビ会議システムを設置し、連携大学との遠隔会議・講義を行うことが可能になるとしている。今後、

同センターを拠点に庄内、最上地方の最上川流域で暮らす住民とともに体験型教育プログラムの開発を目指す。今回はその第一弾としてフォーラムを開催した。

フォーラム初日の20日は庄内町の最上川流域を散策した後、地元の農家、漁師の講話を聞いて流域での生活やかつて栄えた舟漕文化を学んだ。21日は北海道を中心に環境

に配慮した教育を実践している特定非営利活動法人(NPO)法人「ねおす」(札幌市)の宮本英樹専務理事が「自然から学ぶ教育プログラム作り」と題して講演し、「自然の中で遊ぶことで子どもは生きる方法を学んできた。田舎での教育は子どもの成長に良い影響を与えると強調した。パネルディスカッションでは、宮本専務理事、NPO法

周辺の「漂着ごみ」などについて考察する。

10月以降の後期開講科目「最上川伝説講義」では、計15回の講義(1コマ90分間)を通して1単位を認定。地質、魚類や文学など流域の伝統や生活について理解を深める。各専門研究者がリレー形式で講師を務める。

20日には廃校となった庄内町の旧清川小学校舎を活用し、最上川学推進センター開講。住民参加型の地域見学会なども企画する。各機関と同センターをテレビ会議システムで結び、NPOや市民団体と連携して小中学校の授業や生涯学習、教育旅行向けプログラムも考察する。情報サイト「http://www.mogakibeta.wakatek.net」も開設

し、交流活動や研究資料も発信する。

コンソーシアムの事務局を置く山形大大学連携推進室の出川真也准教授は「流域の農山漁村で住民と共に学び、地域の活性化を考えてほしい」と話している。

6月3日 読売新聞

人里の自然文化教育研究所(庄内町の阿部和生研究員、山形大文学部の下平裕之准教授、清川地区漁業協議会の遠藤仁会長)が意見交換。「教育プログラムを構築するためには外部の人とともに流域をよく調べなければならない」「教育活動の成果を地元経済の活性化につなげる必要がある」などの意見が出た。

大学コンソーシアムやまがたは今後、大学生や高校生らを対象にした体験型学習会を、月1回のペースで開くほか、12月には、同目的フォーラムを開く。

彩発見

出川 真也さん 里の自然文化共育研究所専務理事

山形県内町清川。最上川河畔に位置するこの町もいよいよ夏本番、川辺での遊びが楽しい季節となった。

この地区では、今年3月に清川小学校が閉校し、代わって旧校舎には山形大学をはじめとする県内の大学や高等教育機関によって構成される「大学コンソーシアム」による「最上川学推進センター」が設置された。最上川の魅力は舟下り等で堪能できるそのダイナミックな自然観もあるが、それだけではなく、最上川がかかわりながら生きてきた地元住民の生活文化、知恵、技術といった暮らしのスタイルに大きな魅力を感じているのだ。大学コンソーシアムは、こうした流域の農山漁村からの学びを通じて、文化の継承、自然の保全、地域づくりに関与し教育や研究プログラムを地元住民との連携で作

「最上川学サポーター」結成



TOUHOKU SAHAKKEN

出していること動き出している。筆者も地元と大学の間を動きながら、まだまだ課題の残る地域と大学との連携のしくみ作りを走り回っている。

そんな動きの中、先日、学生組織である「最上川学サポーター」(以下、「サポーター」)が結成された。サポーターの学生たちは現地の活動にかわりながら、最上川学事業の高度化と新たな地域づくりプログラムや教育プログラム開発のため、試行実践を行うことを目的としている。また、サポーター間もないが、これまで地元

の農家での農業体験、由連ガイド、羽黒古道の探検、川漁の体験実習、地域調査等に、地元の農家、また川漁師のおじさん、郷土料理に詳しいお母さんなど共に現場の活動に取り組んできた。最上川は、地元の活動を若者たちとつないでいくかということが大切だ。またその教育プログラム開発のためには学生たちとかわる地域の方々の声や反応をどう形にしていけるか、その積み重ねが重要だろうと思う。

そういうわけで立ち上がったサポーターだが、集まってくる学生も多様だ。逆にいえば、このような学生たちの魅力的なところ、最上川流域はさまざまな切り口からアプローチすることが可能極まりの深いフィールドとも言えるのであり、そこで日々奮闘している地元住民の豊かさや魅力であると言えるだろうと思う。

一方、こんな魅力的な流域の農山漁村も近年の少子高齢化、経済低迷の中でその存続すらも危ぶまれる集落が増えつつある。地域を元気をどう作り出していくか、担い手となるべき若者たちとつなげていっていかなくてはならない状況が続いている。

だからサポーターの活動はこのような地域と若者たちの交流と学習の試みと言える。そしてそれは若者たちの、これまでの範疇ではとらえられない新たな生き方の模索といえることができるのかも。

サポーターの活動はまだ緒に就いたばかりで今後の可能性は未知数だ。しかし未だだが元気ある若者たちと地域とのつながりを作り出していくことが、農山漁村の新たな生き方の志を作り、元気を作り出すことになるのではないと思う。

若者と地域の交流に期待

でがわ・しんや 78年長野県生まれ。山形県在住。山村の自然と文化を子どもたちに伝えるのが地域作りを行う「角川里の自然環境学校」の活動に住民と共に取り組む。現在「NPO法人里の自然文化共育研究所」専務理事、山形大准教授。農山漁村や都市部などの多様な住民が参加できる「さくらと学舎」の幅広い展開を目指し活動している。

出川 真也さん 里の自然文化共育研究所専務理事

彩発見

山形県の内陸と平野との境に位置する清川に移住して早くも半年が過ぎた。「ここが母と山間地域をつなぐ最上川川沿いの要所である」とは、地形的にも、また海から地上するサクラマスをつなぐ釣り人を時々川辺で発見する折に肌で実感できる。今春、県内の大学、高等教育機関等が組織する「大学コンソーシアム」が、地元行政、NPO、地域団体と連携して「清川に『最上川学推進センター』を設置したが、まさに最前線の場所に拠点を置くことができた」といってよいのだろうか。そして筆者がこれまでかかわってきた地域づくりや社会教育分野のNPO活動も、新たな連携協働の局面を迎えようとしている。それはフィールドにおける大学と地域の関係性の新たな時代の扉を開き感じさせるものでもある。

大学と地域の新たな連携



TOUHOKU SAHAKKEN

大学が地域にフィールドを求め、研究や教育に活用してきたのは、何年にも始まったことではない。しかし従来のそれは、どちらかというと地域から情報や資料を一方に集めてきて研究活動に利用するという色彩の強いものであり、したがって、フィールドワークの成果を地域に活用していくという志回性はどうしても二の次、三の

相互に知的交流を

次となりがちであった。また、我が国にも始まったことではない。が昔は身な位置づけに始動している面も多く見られるものであった。いずれにしても、連携とか協働とかを標榜しながら、内実、NPO等は単に「フィールド活動」でありがちだったのである。

こうした従来の大学研究教育活動の在り方に比較して、コンソーシアムが、研究・教育プログラムや地域づくりのミッション、それ自体を、地元住民とともに作りだそうという試みであるからである。したがって、地元住民や関係する団体、NPO等は単に「フィールド活動」(情報提供者)ではなく、共に知を形成していくためのパートナーとして位置づけられるべきである。そして、これで行われる調査や研究は、単に「学問」のためではなく、現場に地域を元気にする成果を目指す「生きた学問」を志向しているのだ。

最上川学が「フィールド」となる最上川流域の農山漁村はそのものが、生きた知恵と技術の宝庫であり、暮らしと命を支える知的体系である。プロシエクトは、半半しかりながら本格的に始まって半年余り経ち、大学と地域を社会の双方のコミュニケーションの形は今まだ始まったばかりであるが、徐々にその活動が見えようとしている。

だが、課題もある。先日行われた一画目の最上川学ワークショップ

その時はじめて地域課題に対して、住民が積極的に関与し、主体的に活動しようとする意欲が求められた。その際には、大学と地域との関係性を再構築する必要がある。その際には、大学と地域との関係性を再構築する必要がある。その際には、大学と地域との関係性を再構築する必要がある。

→毎日新聞8月5日

←毎日新聞6月24日

最上川流域で自然体験講座

フロンティア 人びと

※訪書「ヨシモントの巨眼」の巻いを利用して地域責任者
の巻いを利用して地域責任者
の巻いを利用して地域責任者
の巻いを利用して地域責任者

に、体験型教育による地域責任
に、体験型教育による地域責任
に、体験型教育による地域責任

（四野佑郎）

農野無の農家に生まれた出
川、高校生の時、冬季オリンピ
ンに向けて開拓で、遊歩や植
樹活動として土地が植栽され、
地域の協働の在り方が変わって

いくのを目の当たりにした。
「確かに便利になった。でも、
東京の植民地みたい。そんな
思いが心に引っかかっていた。

酒席がヒント

東北大学教育学部に進学した
出川だが、3年生のころには、
ほとんど大学に行かなくなっ

た。「現場に出ない自分からな
いから」。全国の山岳を訪ね歩
いた。とあるシンポジウムで山
形県戸狩村高川地区の住民に出
会った。会場で聴くにつれて、
た自愛と愛する心が「本場にお
いしかった」。

半道も感心だった。酒と字の
取り合わせに、出川は地域を元
気にするヒントがあるように思
えた。2008年、移住を決意
した。

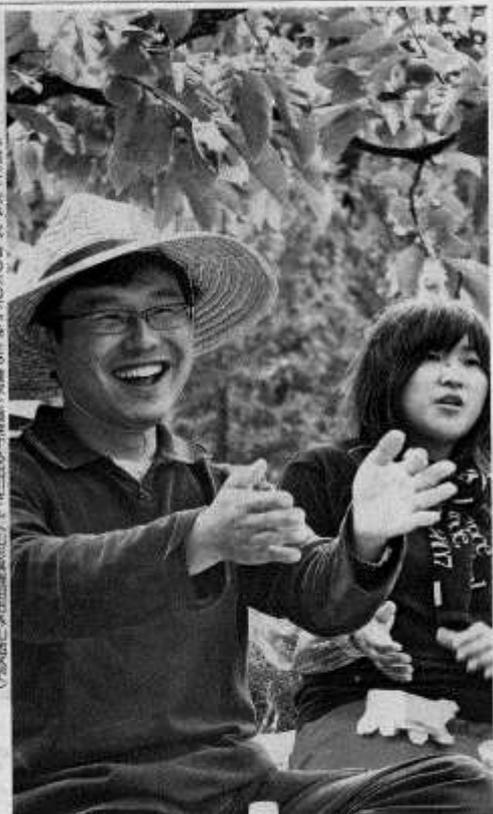
り、「角川里の自然環境学校」
を開校。100人余りの住民が
「里の先生」として子どもら
に山の自然や暮らしを教える体
験講座を始めた。07年には、特
定非営利活動法人（NPO法
人）「山の自然文化共同研究所」
を設立。活動を最上川流域に広
げ、グリーン・ツーリズムの企
画を始めた。農作業や山菜採
り、まきストーブ体験など、何
もない暮らしの一片一片が体験
メニューに変わった。過疎・高
齢化に悩む村々に年間2000
人が訪れるまでになった。

住民相手に「地元学」

交流の橋渡し

出川は「あるもの探し」を提案
した。地域にあるいろいろな
地川魚、きのこ、郷土料理の
土産品と、とらてん、里の知
恵を自然、文化を聞き取り、写
真を撮って、カードに書き留め
た。1冊だけそれが500枚
にもなった。村のまが住居にも
男を交わす女になり、酒をつつあ
った伝統の祝祭も復活した。

先河中畑、最上川下流域の酒
田、外山地区を訪ねると、学生
や農家と山林遊歩に汗を流す出
川の姿があった。切り出した竹
は角川に運ばれ、熊いの湯をつ
くる材料になるという。モノを
介した地域交流高「かつて住
民と農家は距離でつながって
た。分断されたつながりを取り
戻したい」。そんな夢が出川の
背中を担す。



山形県 庄内町 出川 真也さん(30)

補助金や事業があるからやるのではなく、まずはそこに住む人たちがもう一度、自分たちの地域の資源を見直すこと。決して、専門家に頼まないといけないことではない。地元が一番詳しいの

メッセージ

は地元の人々なのだから。若者がいないというが、一番の人材育成は地域資源を生かして、自分たちが楽しくやることだ。面白くやっているところには勝手に人が集まってくる。

作業者「農業を、農の心の二十年生を農業の現場に出すことだ。」(山形県庄内町庄内地区)

日本農業新聞 10月12日

最上川学プロジェクトのコンテンツ展開イメージ

単位互換科目教育プログラム

※全12単位を22年度から実施

- ・最上川巡見・最上川俯瞰講義
- ・最上川の匠たちに聞くⅠ・Ⅱ
- ・最上川の匠たちに出会うⅠ・Ⅱ

学際的研究プロジェクト

※各大学の連携する研究室が主体

- ・食と健康分野
- ・環境保全分野
- ・教育・ビジネス・政策提言分野

最上川学 プロジェクト

地域活性化プロジェクト

※コンソと連携する地域活動団体が主体

コンソは側面的支援を行う。

- ・食と健康の産品開発プロジェクト
- ・環境保全プロジェクト
- ・地域づくり・ビジネスプロジェクト

学生活動プログラム

※学生による地域活動活性化と就職場づくり

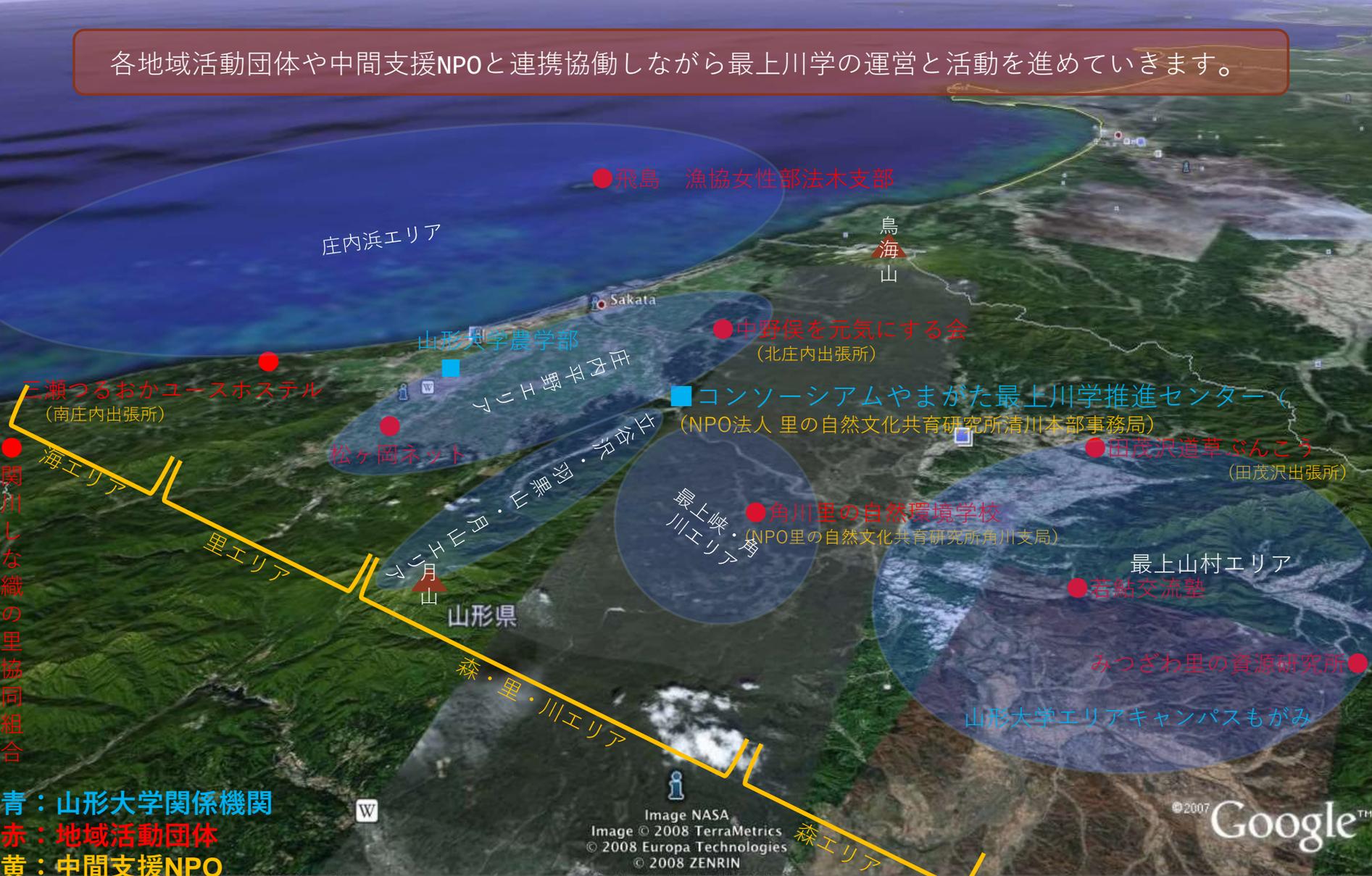
- ・最上川学サポーター活動の拡充
- ・NPO法人の設立
- ・最上川ベンチャー起業の立ち上げ



最上川学現地モデルプログラム運営エリア構想イメージ図（連携NPO・地域活動団体位置図）

大学の多様な力をつないで活用しながら地域の元気を作り出す！

各地域活動団体や中間支援NPOと連携協働しながら最上川学の運営と活動を進めていきます。



関川しな織の里協同組合

青：山形大学関係機関
 赤：地域活動団体
 黄：中間支援NPO

Image NASA
 Image © 2008 TerraMetrics
 © 2008 Europa Technologies
 © 2008 ZENRIN
 ストリーミング 100%

© 2007 Google™

ポイント 38°49'52.04" N 139°59'52.74" E 高度 76 m

上空 35.23 km



角川里の自然環境学校
：農山村1地域



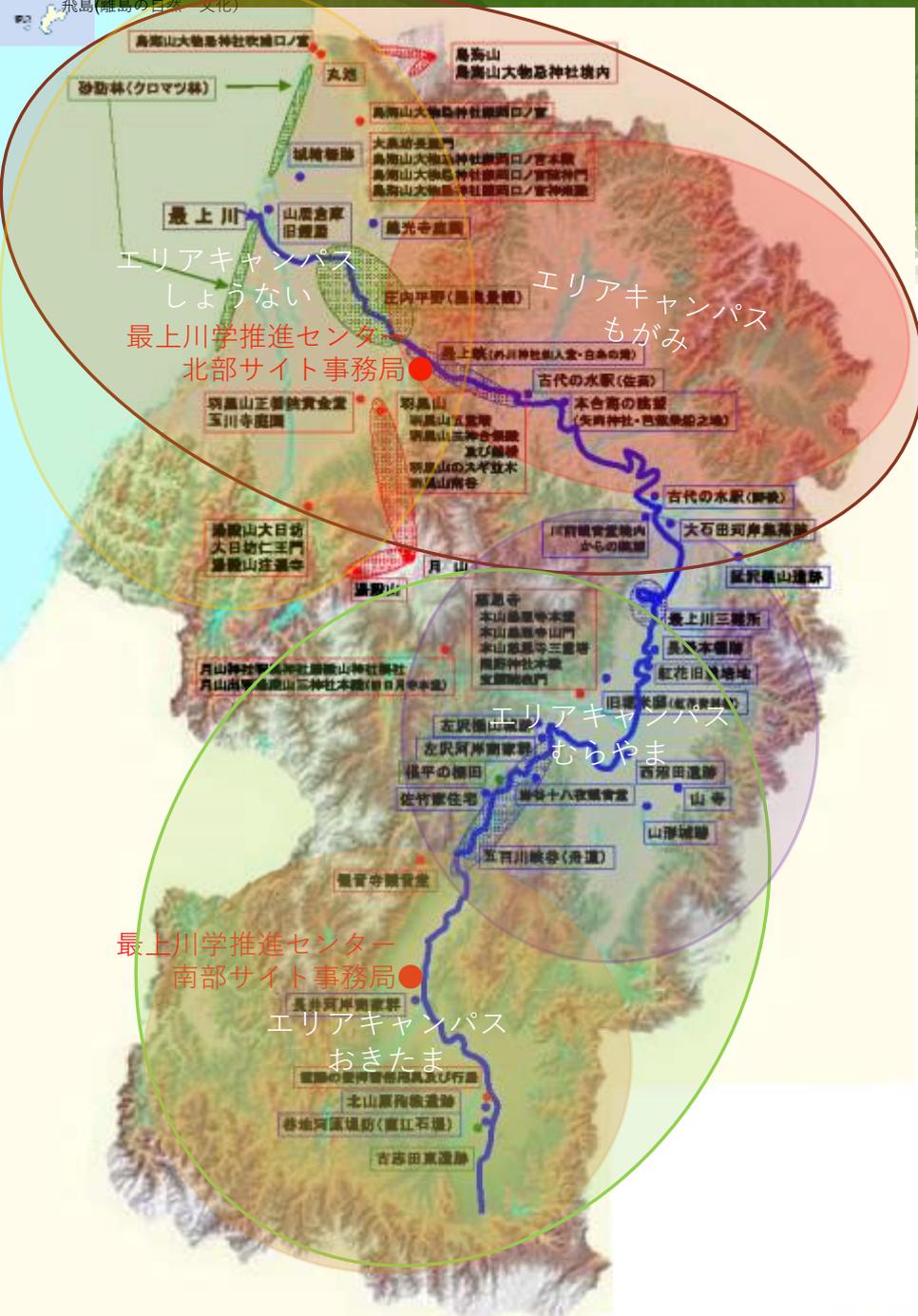
山形大学
エリアキャンパスも
がみ
：農山村1地方



NPO法人
里の自然文化共育研究所
：農山漁村1セット

| (連携協働)

大学コンソーシアムやまがた
：全県域



次の展開は？

最上川学プロジェクトと全県へ「エリアキャンパス」を！

※NPO里の研究所と最上川学コーディネーターの中長期イメージ

北部サイト (重点整備 21年度～22年度)

南部サイト (重点整備 22年度～23年度)

- 大学コンソ最上川学推進センター北部サイト
 (山形大学エリアキャンパスもがみ・しょうない)
 「農山漁村の連携協働」
- 大学コンソ最上川学推進センター南部サイト
 (山形大学エリアキャンパスむらやま・おきたま)
 「都市と地域の連携協働」

各サイトごと地域の元気を作り出すNPO的組織体を育てていくことが重要

さらに次の展開は？

ヨソモンの多様な力をつなぎながら地域の元気を作り出す！

広域連携・多主体連携、そして都市住民との協働へ 「森里川海都市をつなぐ里づくりネットワークプロジェクト」

里づくり活動をより広域に、より多くの人々との協働で進めていこう！
活動の広がりと深まりを目指して「里の自然文化共育研究所」が活動を開始！

海の拠点(酒田市)
海の地元学
と食文化交流

川の拠点(最上峡)
森林再生と
川の体験活動

海辺の拠点(三瀬)
海辺の地元学と
自然体験・保全活動

山・里拠点(角川の里)
里地里山保全活動

しな織の里
伝統工芸品
と里山研修

都市部(山形市・仙台市)
青少年体験活動市民団体
との連携

森・里・川・海・都市をつなぐ地域づくりーふるさと資源による暮らし再生プロジェクトー
 (山形県最上地方・庄内地方)ーNPO法人里の自然文化共育研究所 他6団体ー

